

「21世紀型学力」を どう育んでいくか？



田村 学

文部科学省初等中等教育局 視学官

1962年生まれ。新潟大学教育学部卒業後、上越市立大手町小学校教員、上越教育大学付属小学校教員などを経て、2005年に文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官に（国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官も併任）。2015年より現職。教員時代から、生活科・総合的な学習の時間の実践、カリキュラム研究に取り組み、現在は日本生活科・総合的学習教育学会の理事も務める。

取材・文／松井大助 撮影／平山諭

るようにやることは学校に任せられ、結果、補習に使う学校も出るなど、学校間格差が広がりました。そこで国は本来の目的を果たせるよう、この授業の活動の仕方として、学習指導要領解説に探究のプロセスを示します（9ページの図）。「総合的な学習の時間」は、21世紀型学力の核ともいえる「課題解決のための探究」をする時間と位置付けられました。

一方、そこで学ぶ内容は、各学校で定めるとされています。教科の学習内容が、学習指導要領で定められているのとは大きな相違点。ゆえに「総合的な学習の時間」は、全国画一ではなく、生徒が地域の課題に挑んだり、地元や世界での生き方を考えたりと、その地域・その生徒のリアルな社会課題を探究できるわけです。

そして、そうした実社会と結びついた探究の中で、各教科の学びも生かしてこそ、知識が深く身につく、思考力や表現力も高まることがわかってきています。社会の課題にふれて、生徒に「自分はこうしたい」という、未来を創造する主体としての思いが育つほど、その思いをかなえるために必要な教科のことも自ら学ぼうとし、剥がれにくい知のネットワークが内面に築かれるからです。

社会と結びついた探究が、知識や能力を育む

を次のようにとらえ直しています。

総合的な学習の時間とは 課題解決のための探究の時間

変化の激しいこの21世紀の社会で求められる学力とは何でしょう。

昨年末、高大接続の一体改革について中央教育審議会が取りまとめた答申※では、高校で育む「確かな学力」

① 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

② 知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力

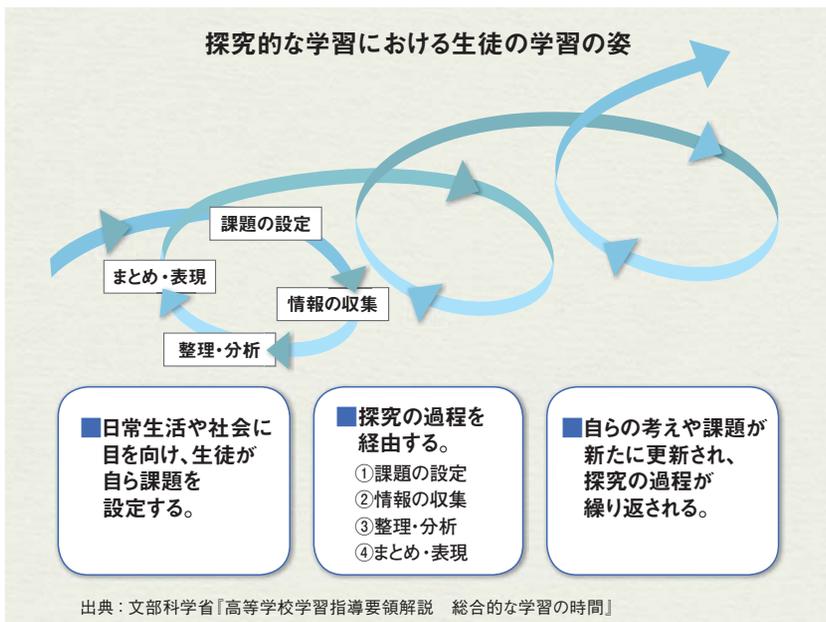
③ 知識・技能

こうした21世紀型学力を育成するにあたり、見つめ直したい授業があります。「総合的な学習の時間」です。そもそもこの時間は、自ら課題を

解決していくような「生きる力」を育むために創設されたものでした。

ただ、当初は「教育の全国画一化の懸念」もあり、各学校が特色を出せ

探究的な学習における生徒の学習の姿



出典：文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間」

例えば、近年の小・中学校の全国学力・学習状況調査でも、生徒が探究学習に取り組みむほど、知識の習得や活用を問うテストの正答率が高まる。相関関係が確認されています。

こうした背景から、次回の学習指導要領の改訂では、生徒や地域の実態を踏まえ、各教科も相互にかかわらせて横断的に教育内容を編成する、いわゆるカリキュラム・マネジメントが

志向されています。「総合的な学習の時間」というのは、これからのそうした



生徒の「内なる問い」をいかに引き出すか

正解を教えるのではなく 生徒の探究と協同を支援する

ただ、探究のプロセスどおりに「総合的な学習の時間」を行っても、生徒の主体性や思考力が育たないこともあります。探究する課題やその解決策を、先生が教えているときです。

ですのでまず確認したいのは、「人は誰しも『問い』を持つている」という前提です。「総合的な学習の時間」で先生に求められるのは、生徒の「内にある問い」が顕在化するように働きかけることだと言えます。

「問いが浮かばない生徒もいる」と思われた方もいるでしょう。ですが、幼児は自分が気になったことだけを夢中で学びます。そこが出発点で、中学生になってテストや入試で評価される中で、興味がないことも受け身で学ぶことに慣れたにすぎません。しかも大学入試は、主体性や思考力重視への改革のまっただなかで、「生徒は教えられたことを学べばいい」という時

た授業のイノベーションを起こしていく起点とも言えるのです。

代ではもうないのです。

では、どうすれば生徒の「内なる問い」を顕在化できるのでしょうか。

一つは、地域体験でも職場体験でも何でもよいので、生徒がある体験をしたときに、違和感や驚き、あこがれなどが生まれるようにすることです。生徒が感じたことと異なる評価や事実を伝えるなど。そのひっかけは、生徒の中に多様な問いを生みます。

二つめは、初期の問いは、生徒が少し興味がある程度でよいのですが、その課題を探る中で豊かな学習活動が展開できるように支援することです。課題候補から選ぶべきは、先生が正

解を教えられるものではありません。その課題について継続的に調査できたり、地域の人に質問できたり、生徒同士で話し合えたりするもの。その豊かな学習活動が「もっと詳しく知りたい」と課題の質を高めます。

三つめは、生徒がほかの生徒や外部

の人と「協同」で探究する機会をつくることです。一人では課題設定ができない生徒も、誰かと二緒だと気づきを得たり、あきらめずに頑張れたりします。そうして協同で探究することは、私たちが実社会で未来を創造するときも求められる重要な力です。

「探究」と「協同」。その実践となる「総合的な学習の時間」は、授業にイノベーションを起こし、生徒が主体的に学ぶ核となり、地域や未来も変えていく。先生方がたずさわるこの授業は、それほどのポテンシャルを持っている時間だと私は考えています。



田村先生の著書『授業を磨く』（東洋館出版社）。21世紀型学力が求められる背景から解説。探究のポイントとなる、生徒の「内なる問い」をいかに引き出すか、その課題の探究の中で生徒が豊かな体験をするにはどう支援すればいいか、といったことも、具体例を交えて紹介している。